

## 中欧研究所と柴先生からの宿題

飯尾 唯紀（東海大学）

柴先生の中欧研究所でのご活動をふりかえり、柴先生が残された宿題を私なりに確認したいと思います。はじめに柴先生と私の接点を少しお話しします。柴先生は日本の東欧史研究を牽引した中核メンバーですから、1990年頃に私が北陸の地方大学で勉強を始めた頃からご著書等ではよく存じ上げていました。当時、東欧革命やユーゴ紛争が続くなかで精力的に情報発信されており、私にとっては、遠く仰ぎみるような存在でした。はじめて直接お話できたのは、2010年、柴先生が東大を退官された際の最終講義とシンポジウムの方だったと記憶しています。お弟子さんにお声がけいただいて参観し、少しお話をさせていただきました。その時は、後に研究所で一緒できるとは思ってもみなかったのですが、私は2011年から城西大学で勤務し、すぐ後に柴先生が城西国際大学に赴任されてイベントなどでお会いする機会ができました。

2013年の秋頃から中欧研究所を設置する話が進み、メールなども頻繁にいただくようになりました。中欧研究所ができてからは、月2回ぐらい研究所のミーティングがあり、また会議やシンポジウムなどイベントのあとには決まって食事やお酒の場がありました。ご研究を含めいろいろなお話をうかがう機会ができ、私にとって大学の勤務の中で大きな楽しみとなりました。2018年に私は他大学に異動しましたが、その後も研究所の外部メンバーに名前を残していただき、研究会などで引き続きご指導いただきました。

東京大学で勤務された頃の柴先生のご活動はみなさんよくご存知かと思いますが、私からは中欧研究所時代の柴先生のご活動やご研究を回顧し、何を引き継ぎ、つないで行くべきか考えてみたいと思います。

### 1. 研究所の立ち上げと運営

まず、中欧研究所の立ち上げと運営に関わるご活動についてお話します。柴先生は、研究所の設置が決まったときから、その活動を充実したものにするため相当の時間と労力を割かれていました。中欧研究所は、2013年のハンガリーのオルバーン首相訪日時に設置が決まったと記憶しています。同時にハンガリーからの研究者派遣も決まり、研究所はその受け皿としても位置づけられました。外交儀礼から始まったといえますが、柴先生は、その箱に中身を与え、恒常的に活動する研究所にするために尽力されていました。

まず、立ち上げに際して国際シンポジウムを開催し、中欧だけでなく東アジアの国々からお付き合いのある著名なスピーカーの方々を招待されました。これは研究所の存在を学外に向けアピールすることに大きく貢献したと思います。また、当初から、研究発表の場としてEジャーナルの刊行を目指されていきました。実際に2015年からはほぼ毎年、ジャーナルがオンライン上で発行され、柴先生はほぼ毎号に寄稿されています。日本語と英語の2言語で研究成果やシンポジウム報告等が掲載され、国外も含めた幅広い国際発信のツールとして研究所の研究活動の要として育っていると思います。

また柴先生は、研究所を研究交流の場にすることを重視されていました。これはあたりまえのことと思われるかもしれませんが、しかし、研究員はそれぞれ別々のキャンパスに所属する教員で、ともすれば定期的なイベントのためだけに集まる場になりがちでした。不定期であってもメンバーが研究を発表し、外からゲストを呼んだりして、小さな地域研究のフォーラムにしようとお考えだったのだと思います。ハンガリーのデブレツェン大学、ペーチ大学から研究者が派遣された2014年秋から半年ほどの間は、研究所外でも名古屋や北海道などで研究会が開かれました。過去のメールを読み返すと、設立当初から研究所を中心に科研費を申請して中欧地域協力の総合的調査を行う企画を立て、残念ながらこの申請は通りませんでした。2016年からは大津留先生を代表とした科研費プロジェクトに加わり研究所を受け皿の一つとするなど、研究フォーラムとしての基礎を作っていただけだと思います。

教育面でも、柴先生は研究所の活用を考えておられたと思います。研究所運営の傍ら城西国際大学の大学院で授業もご担当され、そのお仕事ぶりは別のキャンパスの私にはほとんどわかりませんでした。時々、優秀な大学院生の話などを嬉しそうにお話されていたのが印象に残っています。研究所の研究と教育を橋渡しする活動のひとつに、毎年開かれる学生会議があり、そこではV4諸国や周辺国からの大学院生が研究発表を行っています。資金調達や発表者選定なども例年大変な作業で、研究所のホルバート先生とご一緒に書類の山と格闘されていました。また、学生会議の場に向けて、城西大学、城西国際大学の学生も発表準備をさせ、研究所の活動を教育と結びつけようと言われていたと思います。

他にも中欧諸国から訪れる奨学金留学生の書類審査や選定など、実務的なお仕事に多くの時間を割かれていましたし、最後に直接お会いした2020年春には、学生数名と中欧諸国をめぐるスタディー・ツアーを組織したお話などもされていた事を覚えています。すでに多くのお弟子さんを育て、悠々とご研究に専念されてよいお立場だったかと思いますが、研究所の運営や教育活動との連携に本気で、熱心に取り組まれました。

私自身は他大学に異動し、研究所の仕事で即戦力となることはできなくなっていました。研究・教育交流で何ができるのか考えるべきだと感じています。

## 2. 中欧研究所でのご研究

### (1) 中欧をどうみるか

次に、柴先生の研究所時代のご研究を振り返り、宿題として残されたものを2点ほど考えてみます。

1点目は、中欧をどうみるかという課題です。柴先生はバルカン地域研究者という立場にこだわりを持っておられたと思います。その柴先生が「中欧研究所」の所長として中欧をどう捉えようとされたのかについてです。柴先生のお考えは、さきほど触れたEジャーナルの創刊号で述べられています。結論から言えば、柴先生は、中欧をV4諸国に限定してバルカンすなわち南東欧と截然と分けてしまう見方は、現代の政治状況だけをみた表面的な見方で、歴史的に相対化すべきだというお立場だったと思います。ではどういう範囲を中欧と呼ぶかですが、この点について柴先生は、中欧はゆるやかに「ハプスブルク帝国と隣接地域」とか「ソ連とドイツの狭間のヨーロッパ」と理解しておけばよいと述べられています。重要なのは、地域が時代の変化につれ「伸び縮みする」と理解しておくことであること、また、この地域を特徴づけ続けるキーワードは「多様性」であること、等を指摘されています。宗教や言語、文化などいろいろな領域で、多様なものが混じり合い、組み合わせを変えながら、完全に均質化していくのではない、そうした空間としてとらえておくというお立場だと思えます。

この捉え方は、柴先生の考える東欧の見方とも共通していると思えます。『東欧を知る辞典』（平凡社、2015年）の改訂作業のお話をうかがったときだと記憶しています。柴先生は、東欧社会主義崩壊後であっても、東欧という地域概念は十分使えると思うとおっしゃっていました。ただし東欧という表現に抵抗のある人も増えてきたので、互換可能な概念として中欧を使うというお立場だったかと理解しました。

こうした柴先生の中欧の捉え方をふまえて、歴史的な視野からハンガリーやチェコとセルビアやブルガリアをひとまず同じフレームの中で扱うことで何が見えてくるのか、これは私たちや次の世代の方々がさらに考えていくべき問題だと思えます。さしあたり私は、柴先生のおっしゃる「多様性」というキーワードに加え、制度や人のネットワーク、結びつきを軸にその伸び縮みをみることで、動的に地域をとらえる方向性があるのではないかと考えています。越境する人々のネットワークの重

要性は柴先生もつとに指摘されていましたが、例えば、中欧の南北の間を結ぶものとしては正教会組織や布教、交易のために移動する人々のネットワーク、ドナウ川など河川沿岸都市の結びつきなど、多くの切り口があると思います。骨格や神経、血管などのイメージで動的に中欧地域をとらえていく方法もあるかと思います。もちろん地域の動的把握は膨大な作業だと思いますので、中欧研究所のようなフォーラムを利用しながら、共同研究として行うことがふさわしいと思います。柴先生は、東大の退官時にお弟子さんたちと『東欧地域研究の現在』（山川出版社、2012年）という論集を編まれましたが、それを引き継ぐ研究をしていかなければならないのだと思います。

## （2）セルビア義勇兵と「トドロヴィチ」研究

研究所時代の柴先生の主要な研究対象は、第一次世界大戦期のセルビア義勇兵とトドロヴィチ研究だと思います。とくにトドロヴィチについては、これも雑談の中だったと思いますが、「この年になってやっと（鍵になる）研究対象に巡り会えた」というようなことをおっしゃったのが強く印象に残っています。その時はピンときませんでしたでしたが、ご研究を読み返しながら、柴先生は、個人を突破口に地域研究を超えてグローバル・ヒストリーを描こうとされていたのではないかと想像しました。

トドロヴィチは、20世紀前半に東京外大でロシア語教師を続けたセルビア出身の人物で、第一次世界大戦の戦争捕虜の帰還事業などにも関与した人物とのことです。このトドロヴィチに関する柴先生のご研究の狙いを考えてみると、大きく2つのことを意図されていたのではないかと思います。ひとつは、東欧地域研究をグローバル・ヒストリーとして描くという観点です。セルビア出身でロシアに学んでロシア国籍を取得し、ベッサラビア出身のユダヤ系の妻とともに日本に渡ってロシア語を教えた人物を通して、20世紀初頭のユーラシア大陸の人の移動、戦争、国際関係やナショナリズムのあり方を照射する、そうした研究に着手されていたように思います。これはそれまでの東欧地域研究の枠から大きくはみ出して、新しい研究の方向性だったように思います。

もうひとつは、トドロヴィチという一人の人物の来歴や人間関係、内面まで迫ろうとするマイクロヒストリーの試みという側面です。柴先生の論文からは、個人の歴史を描くために、さまざまな関係資料や証言、時には現在まで生きる子孫に直接連絡をとったりする徹底的な調査がなされた様子が伝わります。一般に、さきほど挙げたグローバル・ヒストリーは、マイクロヒストリーが歴史を細分化して全体像を見えにくくしてしまいがちとなった状況への問題意識から盛んになったことが指摘されます。柴先生のご研究は、マイクロヒストリー的なアプローチでグローバル・ヒストリーを描こうとしたものと読むこともできると思います。トドロヴィチのロシアとの関係、セルビア出身者としての自己理解、第一

次世界大戦時の振る舞い、多彩な交友活動や晩年のアメリカへの渡航など、トドロヴィチを通じて広い世界を描く可能性をお感じになっていたのではないのでしょうか。こうした地域研究からグローバル・ヒストリーへの橋渡しをする作業は、やはりお弟子さんたちや次の世代が引き継ぎ、取り組んでいくべき領域だと思います。こちらも大きな宿題ですが、柴先生はその道筋をつけてくれたように思います。

以上、柴先生がお亡くなりになってから時々考えていることを、まとまりのないままにお話いたしました。柴先生のご発言などを勝手に記憶の中で変換してしまっている部分もあるような気もいたしますが、私なりに宿題を受け止めていきたいと考えています。